カンボジア訪問レポート

壮年会　C地区　有坂　文雄

成田空港からホーチミン空港経由でカンボジアのシエムリアプに向かったベトナム航空機が、高空から雲を突き抜けて高度を落とすと、眼下には広大な湖（トンレサップ湖、琵琶湖の五倍ほどの面積を持つ）が広がっていました。湖に続く広い湿地帯を抜けると、飛行機はやがて地平線にほんのりと残る夕焼けを臨むシエムリアプ空港に着陸しました。日没直後の夕焼けを背景に、数本の椰子の木がシルエットになって見えたのが印象的でした。空港には姉夫婦が出迎えてくれました。

十二月二九日から一月二日まで、わずか四日間でしたが、シエムリアプに姉夫婦を尋ねました。以下はその間、滞在中に義兄・姉の話から垣間見たカンボジアについてのメモです。

話を聴くうちに、現在のカンボジアの状況を理解する上で、ポルポト派による大量殺戮がどのようなものであったかを理解しておくことが必須だと言うことが分かりました。

一九七六ー一九七九

信じがたいことですが、一九七六年から一九七九年までの四年間に二〇〇万人に上る国民がポルポト派によって虐殺されました。これは当時のカンボジアの人口七〇〇万人の約三分の一に当たり、ドイツナチスの大量殺戮に匹敵すると言われます。混乱はこの四年間の前後数年に及びました。大量虐殺の中心人物がポルポトで、フランス留学の経験を持ち、クメールルージュ（ルージュは赤の意）に属していました。この政党は国民の完全な平等を目指していたと言われます。そのためには国民全員が農民であるような社会が望ましく、都市生活は好ましくないと考えられました。都市の知識階級はすべて地方に文字通り強制送還されました。この点は中国の文化大革命がさらに徹底され、外国人も一掃されました。実際、中国からの支援・軍事援助があったようです。このような事件がなぜ起こりえたかについては完全に解明されたわけではありませんが、ある程度の情報を得ていた国連や欧米が、このような大量殺戮を信じるに至

るのが遅かったためと云われます。ポルポトの「国の発展のために今、海外の留学生達の協力が必要である。」という呼びかけに応じて帰国した留学生もことごとく帰国後に殺害されたと云います。全国の学校が監獄と化し、強制収容、殺害が行われました。プノンペンのトゥール・スレーン刑務所跡には当時の様子を伝える、拷問の行われた教室や大量虐殺の陰惨な模様を示す多くの実物と写真が展示されています。筆者はまだ見てないのですが、この間の事情は映画「Killing field」に描かれているということで、ごらんになった方もおられると思います。

ポルポト打倒後も内戦は継続していましたが、一九九一年にパリでカンボジア和平協定が成立し、一九九二年には国連監視下に総選挙が行われました。その結果、ポルポトに対抗した解放軍の中心となったカンボジア国民党が政権を獲得しました。この国連監視下の総選挙の実施には当時の国連大使明石氏の貢献が大きかったということです。なお、シアヌーク殿下は一九七六年帰国後、ポルポト支配下では幽閉状態にありました。総選挙後、再び国王となりましたが、政治的権力は除かれ、象徴的な存在になっています。現在の国王は息子のシハモニです。

大量殺戮の後遺症

この事件のもたらした後遺症は想像を絶するものがあります。カンボジアでのポルポト派による大量殺戮の特殊性は、コソボ、アフリカ、東チモールなど、世界各地で起こった殺戮が、民族あるいは宗教的な対立によるものであったのに対して、この大量殺戮は同じ民族の同国人によるもので、カンボジアの復興のためには、殺害された側のカンボジア人と殺害者の側に立ったカンボジア人との間の和解という困難な障壁を乗り越える必要がありました。殺害した側に立った者も軍の強制によって行った部分が大きく、殺害に荷担しなければ自分が殺されるという状況にあったことも忘れてはならないでしょう。事件から二十年近くが経ち、和解の問題は徐々に解消しつつあるようです。

この大量殺戮は知識階級を標的に行われたため、各分野で指導的立場にあった層の人達が失われたことが復興

を難しいものにしています。事件後、教育機関は壊滅状態でした。また、都市と地方の間の交通機関も破壊されました。以前は教師の社会的地位は高かったと云われますが、内戦以降低くなり、教育者に対する尊敬は低下しました。全国で教師が不足したため、学校の再興に当たって小学卒の人など、資格を持たない多くの人を採用したことにも問題があります。現在、その点は少しずつ改善されてきてはいるといいます。

現在の問題点のひとつは、海外からの援助に頼る体質であり、自立していこうとする気概に欠ける点が挙げられようです。

教育上の問題点

子供の数に対して学校の絶対数が足りませんが、もっと深刻なのは教師の養成が質・量共に不十分なことです。そのため、小学校、中学校は概ね二部制で、田舎では三部制のところもあるそうです。クメール語は比較的よく教えられていますが、算数、理科、社会は時間数が不十分です。英語は中学からで週一時間。英語を身につけたい子は課外で授業を受けています（ＮＧＯや専門学校があります）。

彼らの考える職業はレストラン・ホテルの従業員、さらに上級の仕事としてガイド、外国のＮＧＯの現地スタッフなどがあります。優良企業（ほとんどが外資系）への就職、官僚への道は極めて狭く、特殊なコネによるところが大きいそうです。隣国のベトナムやタイは急速に発展しており、シエムリアプでは子供達は外国からの若い観光客に接する機会が多いので、世界に対して今までよりも目が開かれてくる可能性があります。

希　望

カンボジアの子供達には親を助けたいという気持ちが強く、多くの少年少女が弟、妹を学校にやるために早く自立したい、と思っています。教会では、明日の食べ物にも困るような状況の青年達が、ミサの後、グループに別れて近隣の地域の子供達の支援に出かけています。

漆原夫妻の活動

《きっかけ》

義兄の漆原隆一氏は長年にわたって横浜の私立女子中学・高等学校で教育に携（たずさ）わってきましたが、ある意味で社会の中では特に恵まれた特殊な子供達に接してきたのではないかと思ったそうです。そして、そのような恵まれた家庭の子供達の教育も大切だが、自分の心の中の問題として、能力・親の経済力などの属性を取り払った子供そのものに触れたいと思ったということです。丁度、校長に任命されたときに課せられた課題を一通り達成したのを機に、新しい生き方を探ることを考えたということでした。

対象として、家庭的に恵まれない子供達、学校についていけない子供達、引　きこもりの子供達のためのフリースクールなども考えられましたが、実際問題として場所、経済的なことなどを考えて困難がありました。そんな折、息子の比呂志君の紹介でカンボジアを訪れ、当地の子供達と接して、この子達に直接触れることから始めたいと考えるに至りました。そして、ＮＧＯなどの団体の一員としてではなく、個人として、教会を通して、あるいは修道会のシスター達と協力して子供達と関わることにしました。まず、首都プノンペンで三ヶ月間クメール語の研修を受けた後、シエムリアプに移り住みました。

《現在の活動》

- カンボジアの青年の協力を得ながら、オー村の中学生を主体として、小・中・高の生徒に奨学金（しょうがくきん）の支給を行っています。義務教育では授業料は基本的には無料ですが、教材費、補習授業（実際には重要なことをここでも教える）などの名目で教師にそれらの経費を支払わなくてはならなりません。教師の基本給が低く、教師がその収入に頼っていることにも問題があります。家が貧しく、何人もの子供が小学校に通うような家庭ではその費用や制服・自転車（遠くから通う子供は自転車が必要）購入の費用を賄（まかな）えず、小学校を中途退学する子供達が多くいます。そのような子を少しでも減らすのが目的で、現在五十五名に支給しています。

- シエムリアプ教会の一員として、社会活動に参加しています。チョンクニエとプレクトアルの水上村兼水上教室（子供センター）、陸上ではタオム、ペアク・スナエング、クナトゥマイの子供達に対して青年達が教育的なプログラムを行うのを側面から物品的、経済的に支援しています。
- プノム・クラオムでの音楽教育、養成、授業での支援。
- 自宅で子供達から大人まで職業訓練の観点から日本語教室を無料で行っています。独自に作るプリント教材を使っています。

活動を通していろいろな人と出会うことを貴重な体験と感じている、ということです。

なお、日本から派遣されて、シエムリアプで活動している女子修道会は以下の二つです。

ショファイユの幼きイエズス会

日本では関西以西で数校のカトリック学校の設立母体になっている修道会。シエムリアプでは、シエムリアプ教会の、特に典礼面を助け、また、プレスクールである「プノム・クラオム・子供センター」の運営を任されている。

礼拝会

日本では国内外の女性の「駆け込み寺」的な施設を運営している修道会。カンボジアでは首都プノンペンに、暴力事件や売春などの被害を受けた女性のための「シェルター」的な施設を運営している。シエムリアプでも同様の施設を準備中である。

その他、日本とは直接関係はありませんが、「ミッショナリー・オブ・チャリティー」（マザー・テレサの修道会）も、シエムリアプで孤児や引き取り手のない子供たちを保護する活動をしているということです。

漆原夫妻の活動についてのご質問等は下記にお寄せ下さい。

RYUICHI & KYOKO URUSHIBARA

E-mail: rkurushi@hotmail.co.jp

（隆一・共用）

angelaurushi@hotmail.co.jp （恭子）

郵便宛先：P.O.BOX 93260 SIEMREAP

ANGKOR CAMBODIA

Phone: +855-12-391-461